

From the Pulpit of the Japanese Baptist Church of North Texas
October 7, 2018

自製の御霊
ガラテヤ 5:16-26

(前略)

5:22 しかし、御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、

5:23 柔和、自制であって、これらを否定する律法はない。

5:24 キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまったのである。

5:25 もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もうではないか。

5:26 互にいどみ合い、互にねたみ合って、虚栄に生きてはならない。

一、自制

スウィンドール先生は、すべてのクリスチャンに必要な八つの霊的訓練をあげています。「神との親密さ」、「シンプルであること」、「沈黙とひとりになること」、「明け渡し」、「祈り」、「謙遜」、「自制」、そして「犠牲」です。七番目にあげた訓練、「自制」について、先生はおもしろい話を書いています。

先生がひとりでテレビを見ながらスプーンで一口、一口アイスクリームを口に運んでいるうちに、ハーフガロンのアイスクリームの缶が空っぽになってしまいました。先生は缶についているアイスクリームを「もったいない」と思い、缶をマイクロウェーブに入れてアイスクリームを溶かし、それを吞んでしまいました。文字通り平らげてしまったのです。

そうしてから、先生は、子どもたちがもうすぐ帰ってくるこ

とに、はっと気がつきました。子どもたちが帰ってきたら、きっとアイスクリームに手を伸ばすだろう。もし、アイスクリームが無いことに気付いたら大変なことになると思い、すぐに、同じメーカーの同じ種類のアイスクリームを買いに行きました。そして、フリーザを開けてアイスクリームがもとあったところにきちんと置きました。「これなら、わたしがアイスクリームをひとりで食べてしまったことに誰も気がつかないだろう」と安心したのです。ところが、もともとあったアイスクリームには、こどもが一口だけ食べた跡があって、それは全く新しいものではなかったのです。そのため先生がアイスクリームを平らげたことは、やがて家族のみんなが知るところとなりました。それから、どうなったかは、本には書かれていませんので、みなさんの想像にお任せします。

好物があると、ついついそれを食べ過ぎてしまいます。おしゃべり好きな人は、しゃべりすぎてしまいます。ドライブの好きな人は、車に乗るとスピードを出しすぎます。趣味や仕事に夢中になり、それによって家庭を壊したり、健康を損ねたりすることもあります。

聖書には「罪」を表わすことばがいくつかわかれています。その中のひとつ「ハマルティア」というギリシャ語には「的外れ」という意味があります。向かっている方向が、神が定めた方向とずれているなら、どんなに一所懸命励んだとしても、それは「罪」となります。野球でどんなに遠くにボールを打ったとしても、それがラインから外れていたら、ファウルになるのと同じです。熱心で、また、勤勉であっても、正しい方向に向かっているなければ、それは罪になるのです。「勤勉」であることは良いことです。しかし、方向を間違えると、本来良いものまでが悪いものとなるのです。

人間にとってもっとも望ましいものは「愛」ですが、これも

方向を間違えるととんでもないことになります。子どもを溺愛して駄目にしてしまったり、他の人の配偶者を横取りしたり、愛人に貢ぐために会社のお金を盗むようなことが起こるのです。神の愛をはきちがえて自己愛と混同してしまうこともよくあることです。「愛」という最も美しいものが一番醜いものになるというところに、罪の恐ろしさがあります。

では、何もしないでいれば罪を犯さなくて済むのかというと、そうではありません。聖書によれば、何もしないでいること、「怠慢」（オクネーロス）もまた罪です。ヤコブ 4:17に「人が、なすべき善を知りながら行わなければ、それは彼にとって罪である」とあります。人の心を傷つけてはならないことはもちろんですが、身近にいる人が励ましを必要としている時に知らん顔をしていることや、目の前で行われている間違ったことを見てみぬふりをするなど「怠慢」の罪です。大きな事故が起こり、人命が失われた後の調査では、ほとんどの場合、誰かが、しなければならないことを怠っていたためであることが明らかになります。怠慢は決して小さな罪ではありません。

罪を表わす言葉に、もうひとつ「パラプトーマ」というのがあります。これは「過ち」、あるいは「罪過」と訳され、基準や制限を超えてしまうことを意味します。働くことは良いことです。しかし、働きすぎることは、精神にも肉体にも害になります。生活をエンジョイすることは決して罪ではありません。しかし、それが行き過ぎると罪になります。趣味を楽しむこともクリスチャンに許されています。けれども、それが聖書を学び、神に祈り、礼拝する時間を妨げているなら、罪となります。正義を求める心はなくてはならないものです。しかし、それがたんなる憤りで終わってしまうなら、罪になります。聖書が、「怒ることがあっても、罪を犯してはならない。憤ったままで、日が暮れるようであってはならない。また、悪魔に機会を与え

てはいけない」（エペソ 4:26-27）と教えているとおりです。

「的外れ」の罪は、ステアリング・ホイールが効かなくなった車、「怠慢」の罪はフリーウエーの真ん中で動かなくなった車、「罪過」の罪はブレーキの効かない車に例えることができます。そして、「自制」は車のブレーキのようなものです。ブレーキの効かない車が危険きわまりないように、「自制」が効かない人も、とても危ないのです。まごころから神を尊ぶ人は、罪を犯さない生活を目指し、罪からきよめられたいと願っています。そのためにも、「自制」というブレーキをいつも点検しておきたいと思います。

二、肉の働き

では、どのようにして、「自制」を身に着けることができるのでしょうか。そのためには「肉」について知っておく必要があります。聖書は罪の背後に「肉」があると教えています。聖書でいう「肉」とはキリストを信じる以前の生まれつきの性質のことです。ガラテヤ 5:17に「肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反する」とあるように、生まれつきの性質を持ったままで、自分を訓練しようとしても、それは、神に逆らう古い性質を強くすることなのです。

「肉」は訓練して良くなるものではありません。それは捨てるしかないもの、「死なせる」しかないものです。しかし、そんなことが可能なのでしょうか。人間にはできません。しかし、神には出来ます。そして、神はそれをイエス・キリストの十字架によって成し遂げてくださったのです。

ガラテヤ 5:24に「キリスト・イエスに属する者は、自分の肉を、その情と欲と共に十字架につけてしまったのである」とあります。イエスが十字架で死なれたとき、わたしたちの「肉」、また「古い人」、あるいは「自我」と呼ばれるものも、そこで

死んだのです。そして、キリストの復活とともに、わたしたちの「霊」、また「新しい人」が生きたのです。聖書は、キリストが「わたしのために」死んでくださったことだけでなく、わたしがキリストとともに死んだということを、多くの箇所ですべてのクリスチャンがしっかりと学んでおかなければならないことです。

クリスチャンは、この真理を神のことばによって学び、バプテスマと晩餐式によって体験します。バプテスマで水に浸されたとき、古いわたしはそこで死んだのです。再び水から上がったとき、そこに新しいわたしが生まれたのです。また、晩餐式でキリストの十字架を記念するとき、あの十字架で、イエスだけでなく、このわたしもイエスと一緒に死んだのだということを再確認するのです。ガラテヤ 3:1 に「ああ、物わかりのわるいガラテヤ人よ。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に描き出されたのに、いったい、だれがあなたがたを惑わしたのか」とあります。「十字架につけられたイエス・キリスト」はどのようにしてガラテヤの人々の目の前に描き出されたのでしょうか。それは、晩餐式によってです。晩餐式で、わたしたちはキリストの十字架を目のあたりにするのです。十字架が二千年前の遠いかなたのできごとではなく、今、ここで、わたしの「肉」が、「古い人」がキリストの十字架とともに死んだことを確認するのです。

わたしたちは肉に死に、聖霊によって生かされました。ガラテヤ 5:25 に「もしわたしたちが御霊によって生きるのなら、また御霊によって進もうではないか」とあるように、聖霊によって生かされ、聖霊によって「歩む」ことによって、わたしたちは、「自制」の実を持つことができるようになるのです。

三、聖霊の実

「御霊によって歩む」ことができるためには、踏まなければならない段階があります。まず、「御霊によって生まれる」ことです。主イエスは「だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない。肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である。」（ヨハネ 3:5-6）と言われました。イエス・キリストを信じる時、聖霊がわたしたちのうちに働いて、わたしたちは新しく生まれ変わります。この「生まれ変わり」が無ければ、わたしたちは「肉」のままです。

次に「霊の人」へと成長することです。コリント第一 3:1-3 にこう書かれています。「兄弟たちよ。わたしはあなたがたには、霊の人に対するように話すことができず、むしろ、肉に属する者、すなわち、キリストにある幼な子に話すように話した。あなたがたに乳を飲ませて、堅い食物は与えなかった。食べる力が、まだあなたがたになかったからである。今になってもその力がない。あなたがたはまだ、肉の人だからである。あなたがたの間に、ねたみや争いがあるのは、あなたがたが肉の人であって、普通の人間のように歩いているためではないか。」
「霊の人」、「肉の人」、「普通の人」という言葉があります。「普通の人」というのは「生まれつきの人」、「聖霊による生まれ変わりを経験していない人」という意味です。本当なら、聖霊によって生まれた人は皆、「霊の人」、あるいは「御霊に属する人」のはずなのですが、残念ながら、聖霊をいただいているのに、聖霊に従うよりも、肉のままで歩んでいる人もあり、そうした人が「肉の人」、あるいは「肉に属する人」と呼ばれています。

「肉に属する人」は、また「キリストにある幼な子」と呼ばれています。この人たちは生まれ変わっていないわけでも、キ

リストから切り離されているわけでもありません。「キリストにある」と言われているように、キリストのものとされ、聖霊をいただいているのです。

「幼な子」というと、良い意味では純粹で、成長の可能性を秘めていることを意味しますが、ここでは「わがままで身勝手な者」という意味で使われています。赤ちゃんはおなかがすけば泣き、ミルクをもらおうと機嫌がよくなります。全くの自己中心で、自分の満足のためだけに生きています。つまり「快・不快」の原理で生きています。こどもは成長するにつれて「善・悪」が行動の基準になっていきます。おとなになると「損・得」という判断基準も加わります。赤ちゃんやちいさい子どもはわがままでも、それをそのまま見せるので、それが許されるのですが、大人がそんなことをすれば「あの人はインマチュアだ」と非難されるでしょう。大人になっても、自分がしたいことを、したい時に、したいようにするという自己中心性が強く残っている場合があるように、「肉の人」も、クリスチャンであるのに、それにふさわしくない生き方をするのです。わたしたちは、「肉の人」から「霊の人」へ、「キリストにある幼な子」ではなく「キリストにある成人」（コロサイ 1:28）へと成長するよう召されています。

この召しにこたえるとき、わたしたちから、「不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐい」という「肉の働き」が追放され、そのかわりに「愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制」という「御霊の実」が結ばれていくのです。

「肉」から生みだされるものが「肉の〈働き〉」と呼ばれ、聖霊から生み出されるものが、「御霊の〈実〉」と言われていることに注意してください。「肉の人」はいつも活動的です。

文字通り、「あれをして、これもして」と様々な「活動」を追いかけます。何かをして自己実現を計ります。しかも自分の力でそれをしようとします。「肉の人」は“Doing”の世界に生きています。

しかし、「霊の人」は違います。植物がが実をならせるように、聖霊の実を結ぶのです。植物は植えられたところにじっとしています。動き回りません。しかし、何もしていないのではありません。地中に深く根を張ります。枝を伸ばし、その葉で太陽の光を受けます。霊の人と同じです。キリストに根ざし、御言葉の養分を得て育ちます。神のみ顔を追い求め、その恵みを受けとります。暑さ、寒さ、嵐や害虫が木を脅かすように、「霊の人」にも試練が訪れます。しかし、「霊の人」はそれに耐えます。自分の働きではなく、神の命、力に期待します。「霊の人」は“Being”の世界に生きるのです。

「自制」の訓練、それは、「我慢の訓練」ではありません。それは、キリストの十字架のうちに「肉」の死を認める訓練です。聖霊によって生かされていることを知る訓練です。そして、聖霊によって歩む訓練です。聖霊による歩みが、わたしたちに「自制」の実をもたらすのです。

（祈り）

父なる神さま、わたしたちは、かつては「肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行なう」者でした（エペソ 2:3）。しかし、あなたは、そんなわたしたちを聖霊によって生かし、「肉の働き」から離れ、「聖霊の実」を結ぶものへと変えてくださいました。Doingの世界から Beingの世界に移してくださいました。わたしたちが、礼拝と神の国のための奉仕からはじめて、日常のあらゆることにおいても、聖霊によって歩むことができるよう、教え、導いてください。キリストのお名前前で祈ります。